注連縄にみる伝承形態の調査研究（II）

―― 四国地方 ――

A Study of Traditional Form "Shimenawa" (II)

―― in Shikoku Area ――

佐藤武郎　　河野公記　　陶山昌生

まえがき

1977年，九州地方の注連縄の伝承形態について，その総括を本紀要に報告した。今回は四国地方のその全貌について発表しようとするものである。

注連縄は神のよりしろであり，外部からの侵犯を防止する機能を有し，同時に豊饒を祈るものであることは，前回既に述べた。このような精神構造について，川添登氏は生活学[1]の中で次のように述べている。「日本人は，古い時代から狭い列島の中で，多くの人口が，同じ言語，同じ民族で生活していた…中略…一木一草にいたるまでを，生あるものとして考え，さらには，かまどの神，釜の神というように，生活用具すら心あるものと考えてきた」という。

つまり，注連縄のもつ本質的な形成的要因は，上述したような精神構造の中から生まれた表徴的形態とみてよいのではなかろうか。

機械文明の発達は，生活構造も変化させているが，特に都市生活のライフ・スタイルと農村のそれは既に類型化し，伝統的倫理観の喪失，つまり伝承的コミュニティを衰退せしめている。例えば，四国地方の注連縄の現状を概説すると，土佐湾に面するところの，土佐清水から室戸を結ぶ一帯は人口密度が低く，高知市を例外として，他の市町村には民家に注連縄の飾りをみなかった（1977年12月調査時）。しかし，香川県から，受媛県のいわゆる瀬戸内海に面する商業都市においては数種の形態様式をみることができた。つまり，過疎問題は単に人口の問題ではなく，精神構造においても，変化せしめていることが窺える。九州地方の総括[2]前文で述べたような注連縄の本来的な意義が薄れて，正月という行事のためのシンボルとして，商業的意味合による継承へと移行している。とはいえ，長い時代の線上で継承されるものには，何らかの社会的存在理由を有するわけで，それには生きた営みの魂があり，その形態的な様相には地域的特色を有して，種々の形態変化をみることができるといえるのである。

I．研究目的

正月の「シメ飾り」=「注連縄」をデザイン的見地より調査分析し，注連縄のもつ造形的様相美の再見を目的とする。

II．調査研究の手続

1. 四国地方（香川県，徳島県，高知県，愛媛県）において一般家庭で飾る注連縄。
2. 調査期間
   1977年（12月26日より同年12月31日まで）
3. 収集の手続
   四国各県に出向して収集を行った。
4. 写真による形態の記録
5. 注連縄の付属物（飾り）を除去した基本体（礎形）の構造分析。

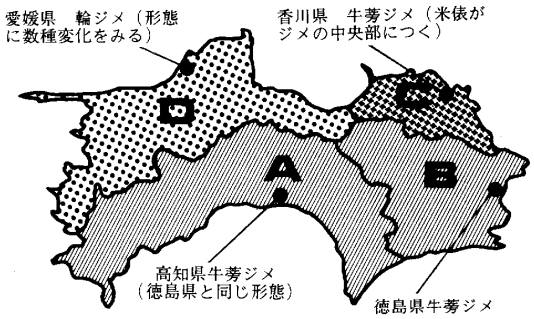


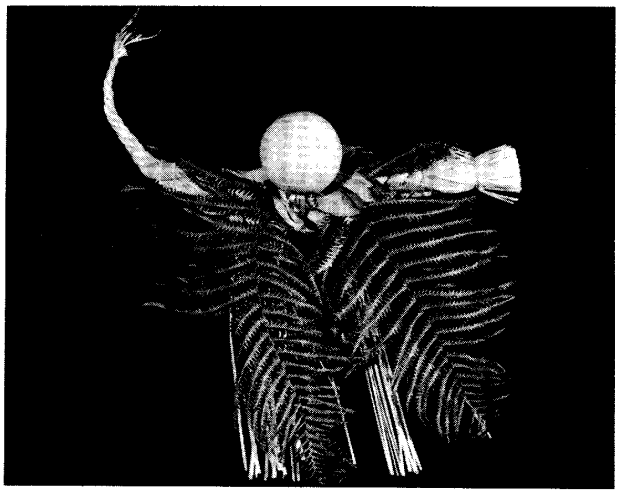
Fig 1　注連縄の形態分類（四国地方）

III. 考察と結果

地域別に考察をすすめるが，捜図※印は各地域の代表的（主流をなす）形態とみてよい。本研究で使用する用語は民族学で用いられている四つの分類，つまり，牛蒡ジメ，板ジメ，輪ジメ，一文字ジメの四種に因って考察した。Fig 1 は四国地方の形態分布図である。

1．高知県（牛蒡ジメ）Fig 1 — A

高知県の注連縄は，Fig 2 — a のような牛蒡ジメである。形態は左向であり，飾りは，だいだい，裏白，譲葉である。Fig 2 — b をみると，綯い尻が上へ反り，いきいきした生命感が感じられるが，シデが九州の牛蒡ジメより細長く，ボディのシメとのバランスが少々気になる。高知県では，土佐湾から見て，西部の宿毛市，中村市、大方町，佐賀町，窪川町等の市町村では，まったく注連縄の飾りをみなかった。さらに，東部，東洋町，室戸市，安芸市でも同様である。しかし，高知市で収集した注連縄の形態が，古くからこの地方の民家で飾られて来たものであることは，注連縄を現代飾っていない地域の人にも確認された。この調査でいえることは，高知県では県下最大の都市である高知市で，この伝承をみる程度で非常に衰退しているし，他に異種の形態をみなかった。



高知県　※Fig 2 — a

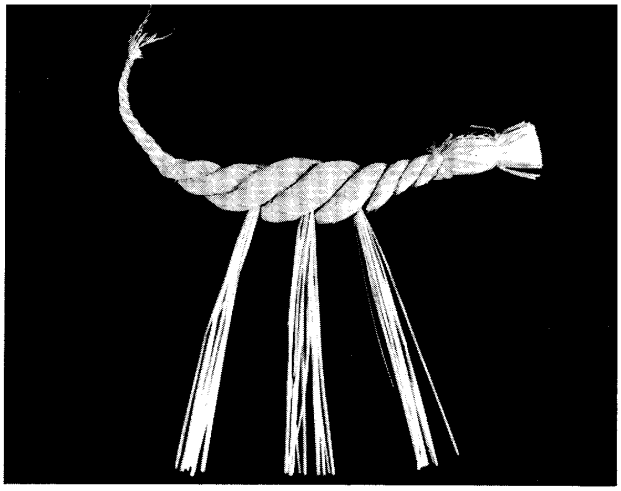
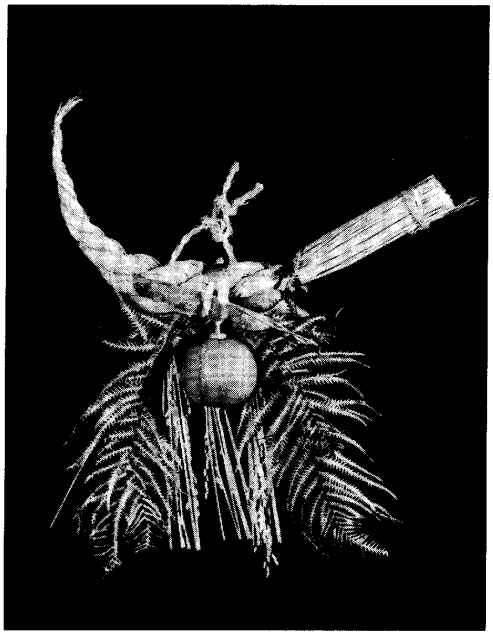


Fig 2 — b

2．徳島県（牛蒡ジメ）Fig 1 — B

徳島県の注連縄は，Aig 3 — a であり，高知県の形態とほぼ同じ牛蒡ジメである。飾りも，だいだい，裏白，譲葉である。Fig 3 —bにみられるように，シデに稲穂が下り，ボディ中央部にさげるための結びがある。以上の特徴は，高知県のそれと比較すると，一段と生



徳島県　※Fig 3 — a

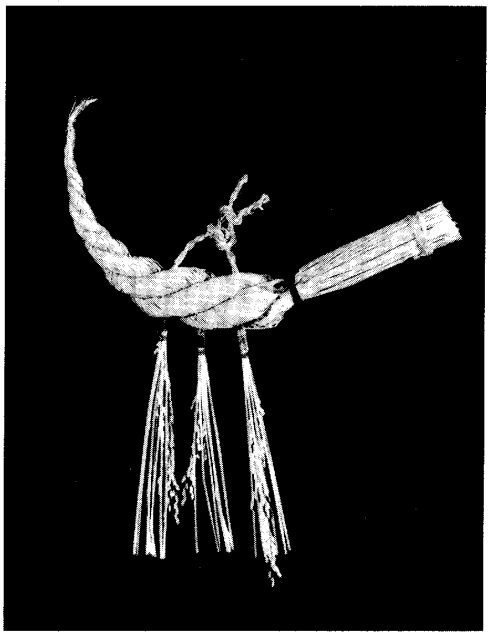
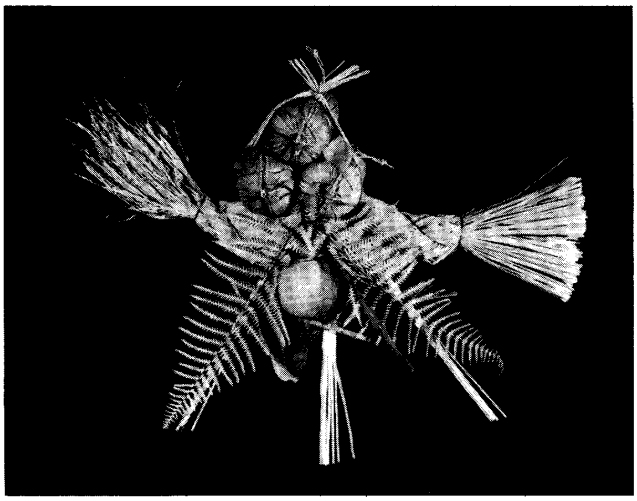


Fig 3 — b



香川県　※Fig 4 —a

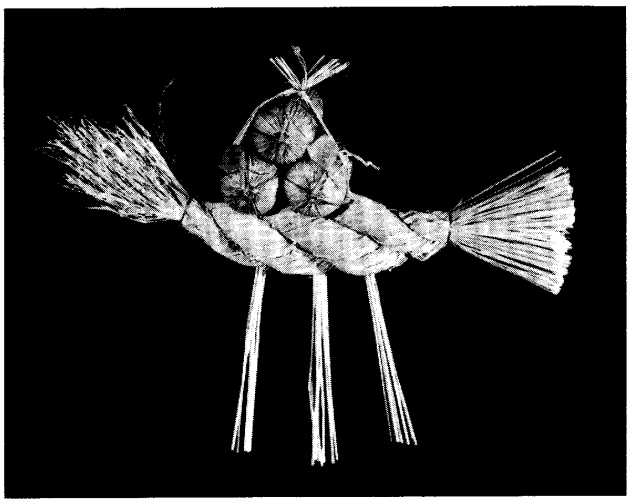
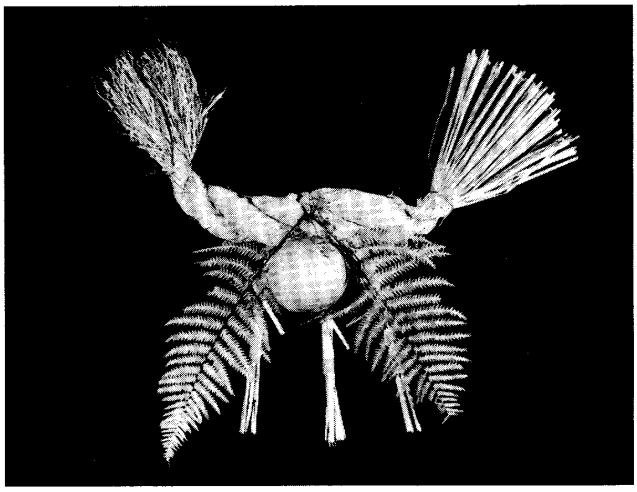


Fig 4 —b



香川県　Fig 5

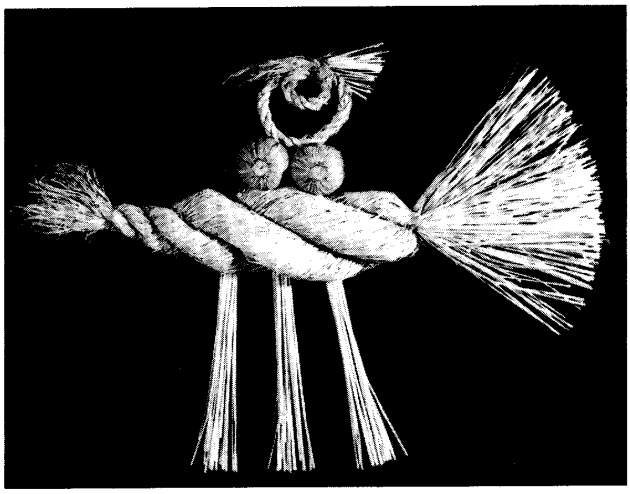
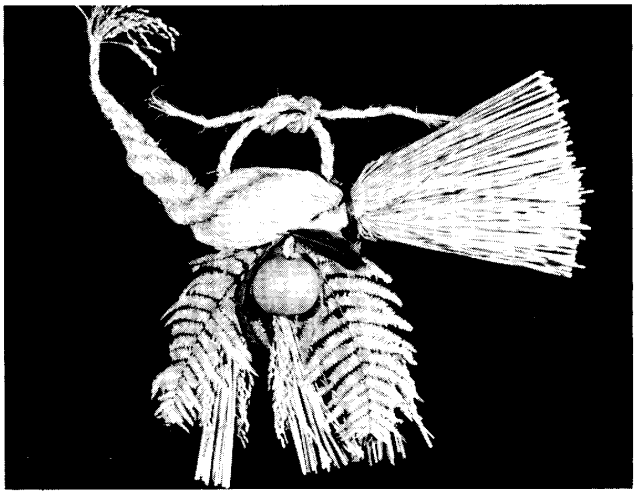


Fig 4 —C



香川県　Fig 6 —a

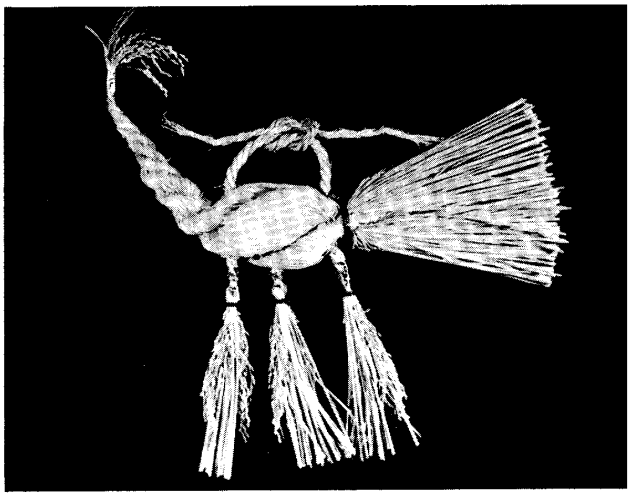
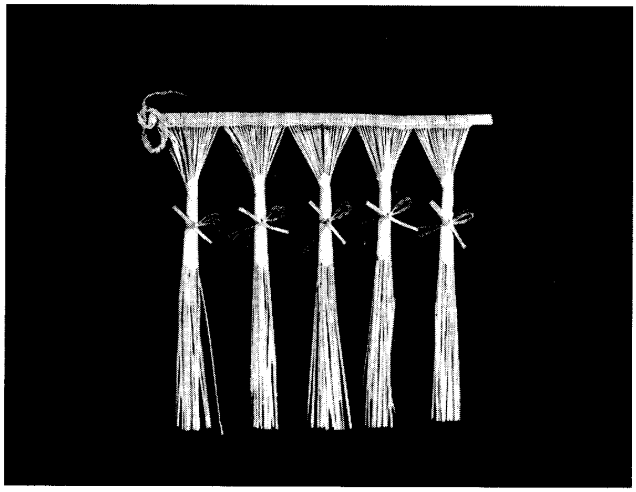


Fig 6 —b



香川県　Fig 7 —a

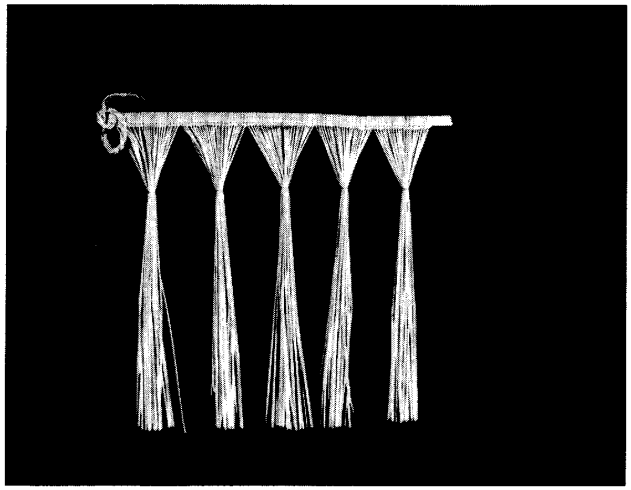
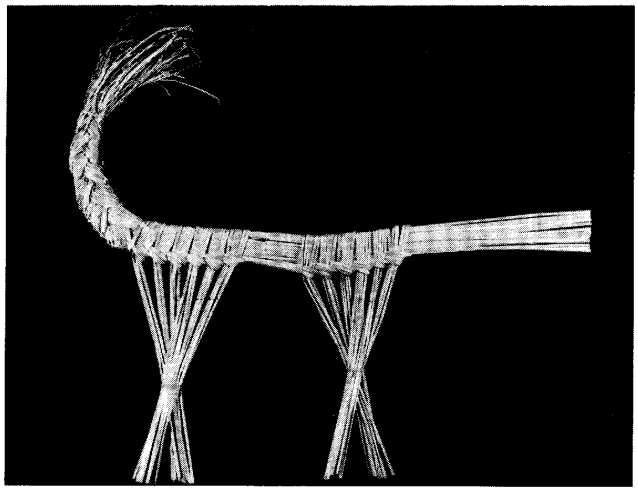


Fig 7 —b



香川県　Fig 8

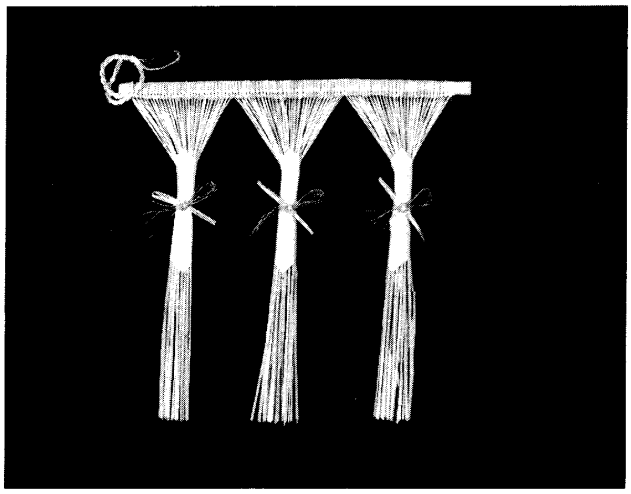
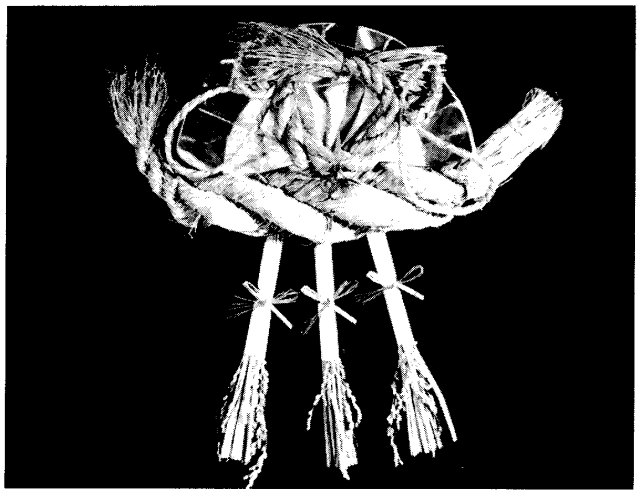


Fig 7 —c



香川県　Fig 9 —a

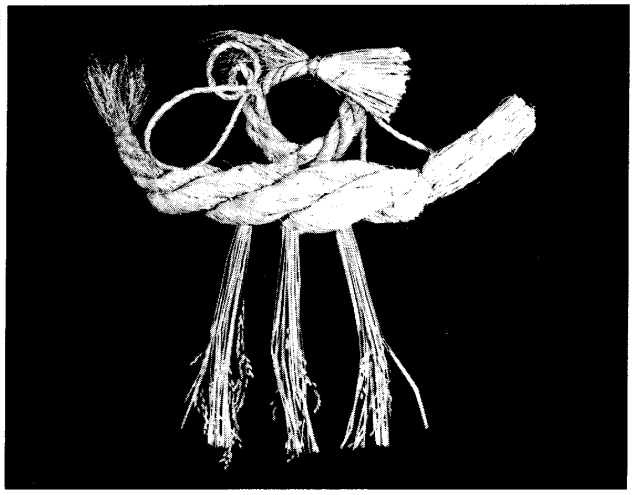
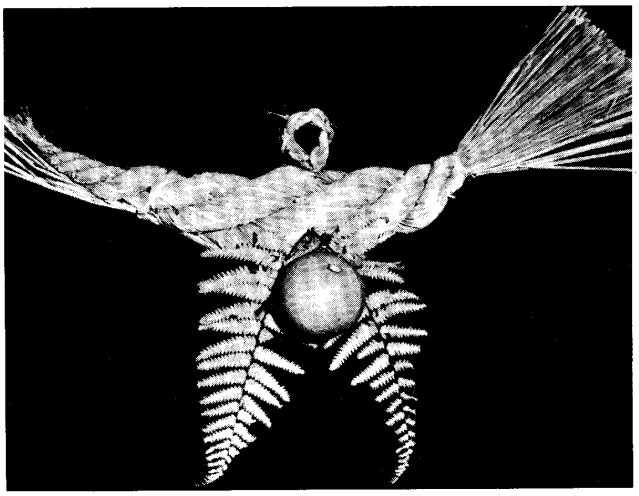


Fig 9 —b



香川県　Fig10－a

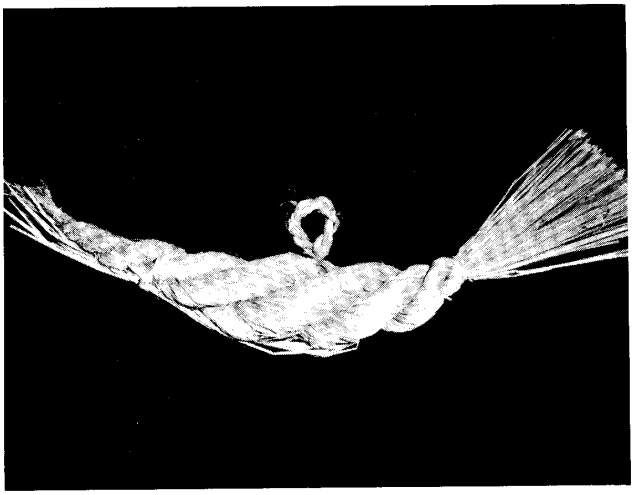


Fig10－b

命感が強調されて美しい形態である。徳島県南部の町村ではやはり，それをみないが北部の市部，阿南市，小松島市，徳島市，鳴門市などでは，この形態をみることができた。

3．香川県（牛蒡ジメ）Fig 1－C

香川県の注連縄は，Fig 4－a が主流の形態であり，牛蒡ジメである。飾りは，だいだい，裏白であるが，Fig 4－b でみると，礎形，中央上部に米俵をのせている。正に豊饒を祈るシンボルとしての注連縄であり，これまでの調査ではじめてみる伝承形態である。Fig 4－b で明らかなように，礎形のシメが非常に太い。Fig 4－c では，米俵が 3 個から 2 個になり，さらに，上部に輪ジメが加わっている。Fig 5 は，上部に飾りがないが，礎形の左右を逆コの字に曲げ，形態のバランスを調整している。Fig 6－a の形態は，高知県のものと類似しているが非常にボリュームがある。飾りは，だいだい，裏白，譲葉が付帯されている。Fig 6－b のように，シデが稲穂付きの（房状）豪華なものである。以上の注連縄は，松山市内，および，その周辺で収集した，古い城下町の風習が近代化をしたこの街に残り，シメの技法も丁寧である。また，挿図のように数種のヴァリエーションをみることができ，ある種の完成されたスタイルの域にあるとみてよい。

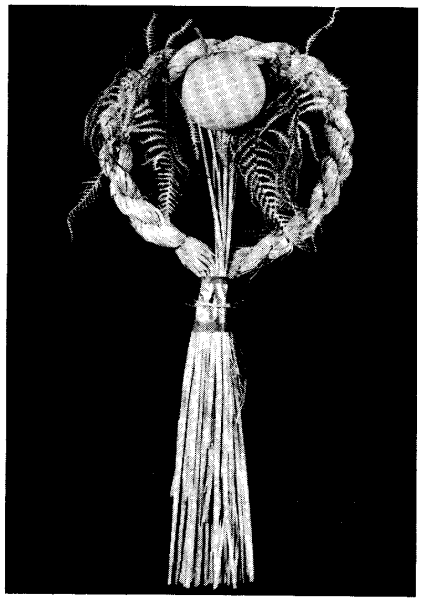
Fig 7，Fig 8，Fig 9 は香川県志度町で収集したものである。Fig 7－a の注連縄は，民俗学で分類されている用語の範疇で考察不可能な形態である。Fig 7－b，Fig 7－c でみるように，民芸品といってよいほど，そのシメは瀟洒で緻密である。5 条，3 条の祝い数で区分し，シデのまとめを水引で結えた美しい形態である。さらに，そのヴァリエーションである Fig 8 は馬を連想するユニークな形態である。Fig 9－a は，松山市の注連縄と同種の礎形で形成されたものであるが，中央上部の飾りが，装飾過多である。Fig 9－b で礎形だけでみた方が美的である。Fig10－a は，同県，丸亀市で収集した。飾りが少なく，Fig10－b でみると，まったくシンプルな牛蒡ジメである。不思議にシデが省略されている。総括すると，香川県の注連縄は牛蒡ジメ（大根ジメ）であり，上記のように礎形にも，飾りにも，数種のヴァリエーションをみることができた。

4．愛媛県（輪ジメ）Fig 1－D

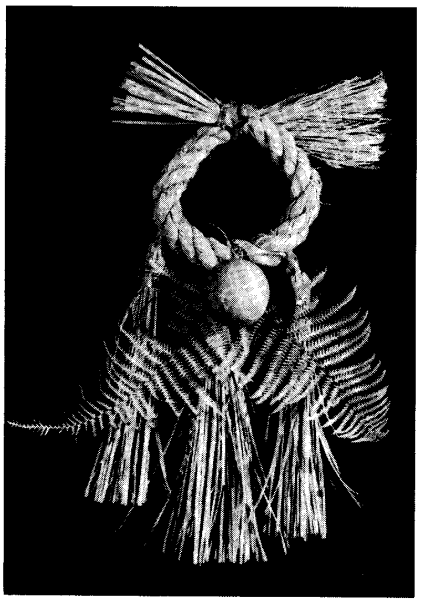
愛媛県の注連縄は輪ジメが主流である。Fig11－a は，松山市の注連縄である。輪ジメの原形は，Fig16 でみるように，1 本の紐状の注連縄を輪状に結んだものである。松山市の場合，シデを輪の上部中央より下げ，輪の中央をつきぬけて垂直にまとめためずらしいデザインである。飾りは，だいだい，裏白である。Fig11－b により，シメの構造が明確に理解されるが，この形態が意識的にデザインされたものであることは，Fig11－a の輪の下部，金紙で形を整えていることでわかる。挿図にはないが，松山駅前で一本の縄状（一文字ジメ）の注連縄も収集した。つまり，輪ジメと一文字ジメは密接な関係にあると思われる。

Fig12－a の注連縄の形態を愛媛県の主流とみたい。Fig12－b でみられるように，シデが本格的な房状で 3 条さがる。Fig13－a は，房が 2 条である。Fig 13－b はその礎形。この形態は全県的で，北部今治市や南部の八幡浜でも収集できた。

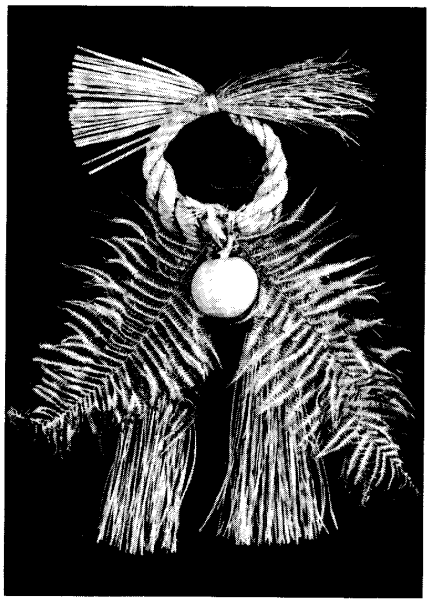
Fig14－a は，シデにボリュームがあるが一文字ジメである。この場合Fig14－b でわかるように，礎形を一本の線に保つため，竹で補強している。飾りは，だいたい，裏白，要所を金紙でシメている。シデが本



愛媛県　Fig11－a



愛媛県　※Fig12－a



愛媛県　Fig13－a

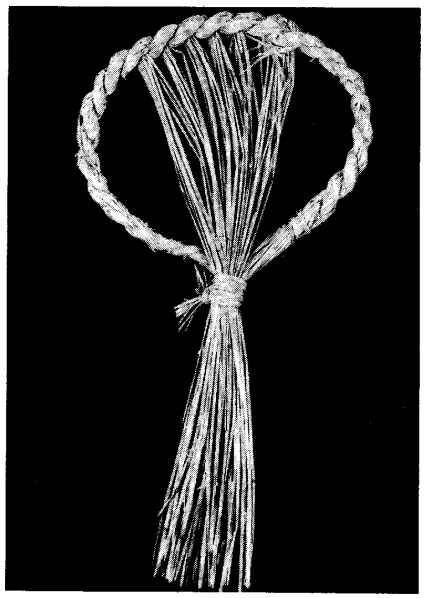


Fig11－b

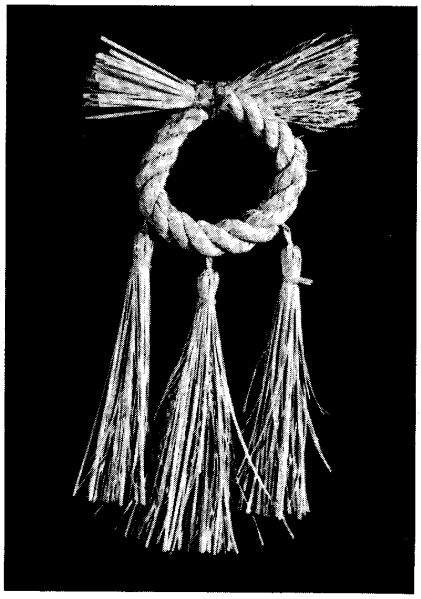


Fig12－b

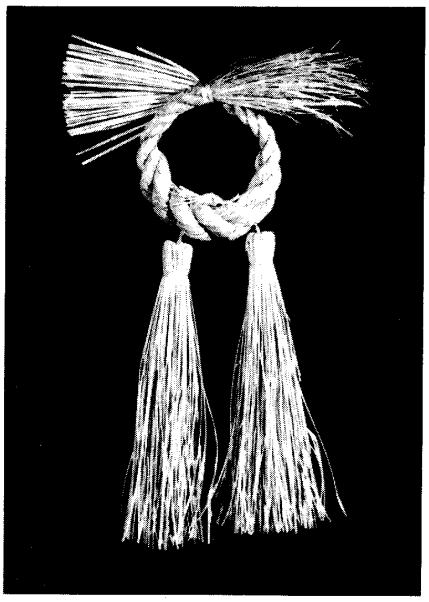


Fig13－b

格的な房状を成し，3条であるが2房を一束にして下げる。今治市で収集した。

Fig15－aは，愛媛県北部，新浜市萩生で収集した。また，同県南部，宇和町で町中，軒並にこの注連縄を飾っているのをみた。この形態はシデが均一に，一つの面を形成しているため，板ジメとしておこう。飾りは，だいだい，裏白である。

Fig17は，愛媛県北部，川之江市で収集したが，注連縄の伝承的精神性が薄く，商業主義的である。飾りも，けばけばしく，礎形の美しさと裏腹である。シメの礎形の綯尻が右向であることにも，注連縄の様式的意味合からはずれていることが窺える。

Fig12，Fig13，Fig18－aは，愛媛県南部，大州市や八幡浜市で収集したが，輪ジメの立派なものである。Fig18－aではシデが稲穂であり，3条の束は，それぞれ水引をかけて非常に丁寧である。Fig18－cはシデが1条であるが，稲穂のモミが豊かであり，よほど注連縄のために，稲穂の保存に特別な工夫がなされたものと思われる。八幡浜で注連縄を収集したが，この地方では，だいだいとよばず「イノス」を飾るという。

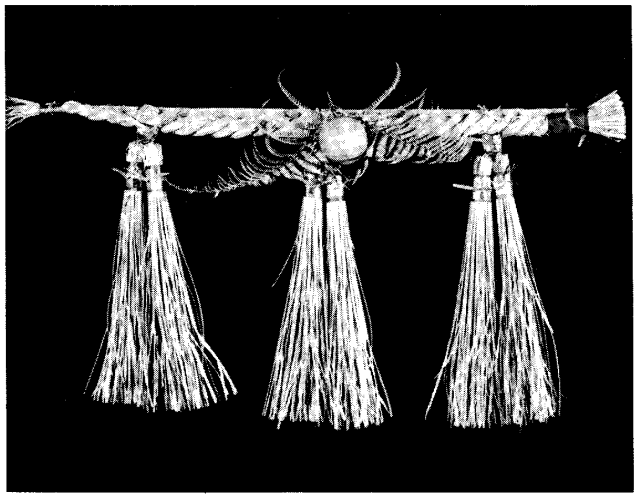


Fig14－a

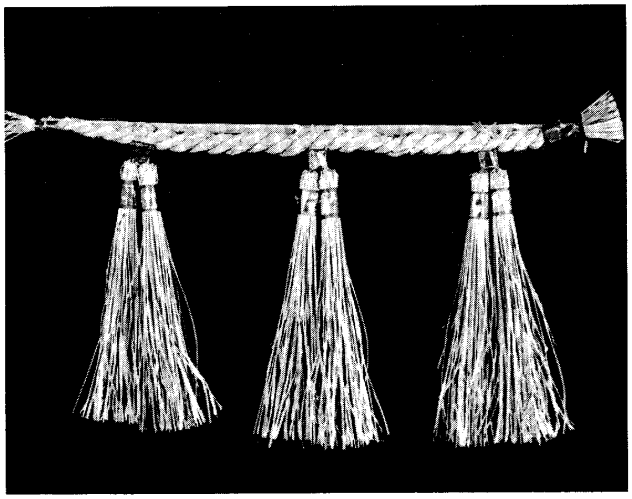
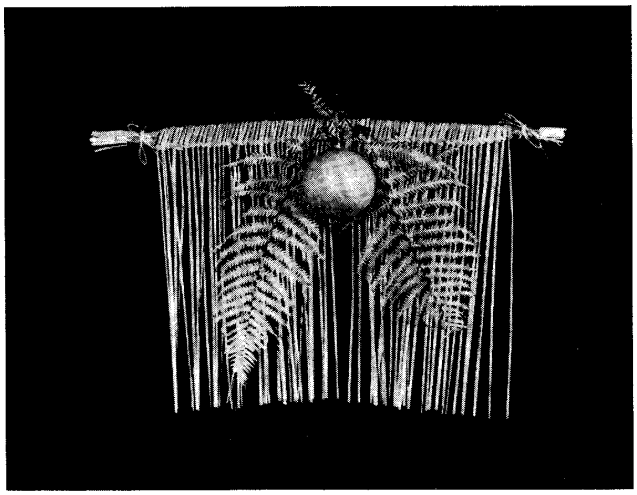


Fig14－b



愛媛県　Fig15－a

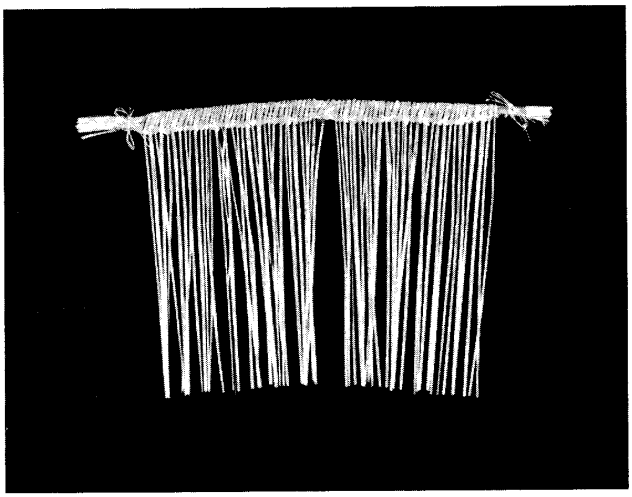
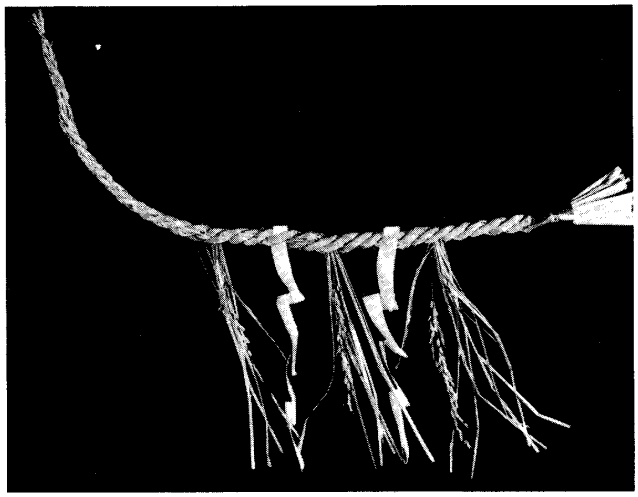
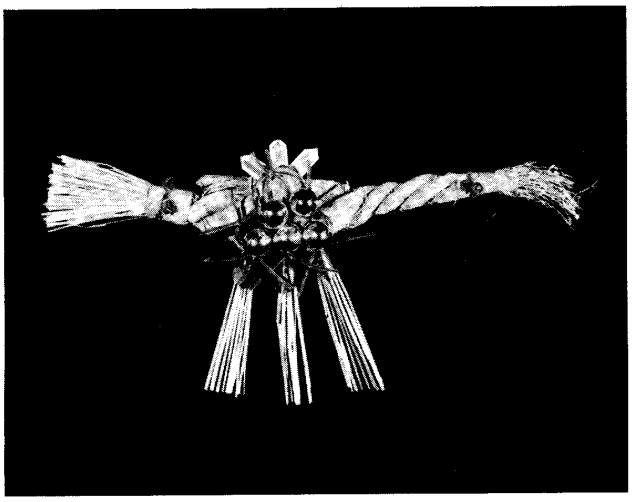


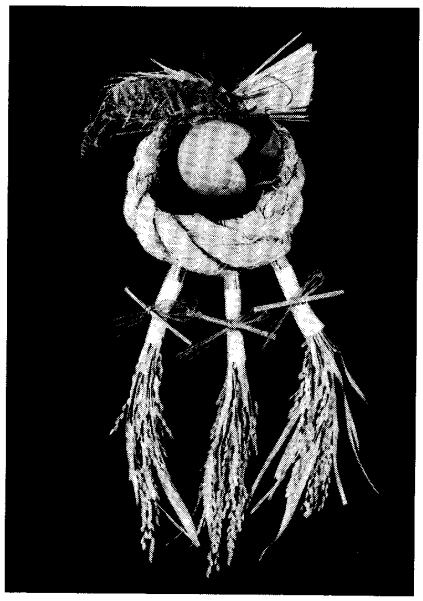
Fig15－b



愛媛県　Fig16



愛媛県　Fig17



愛媛県　Fig18－a

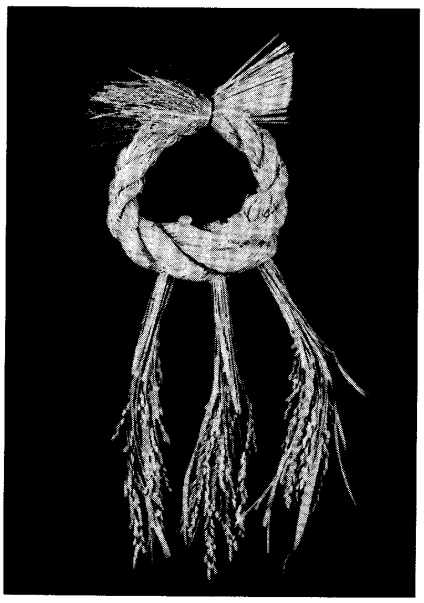


Fig18－b

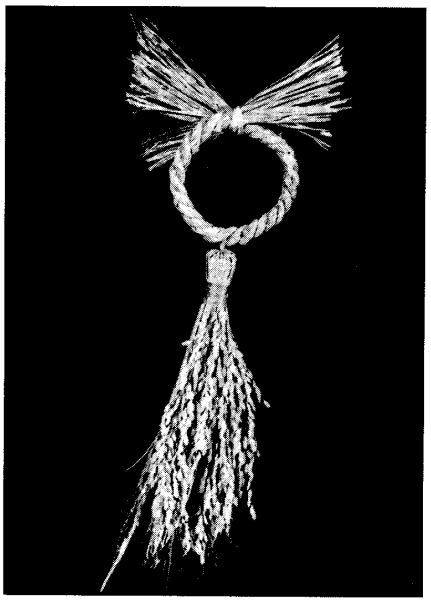


Fig18－c

ま と め

以上のように，四国地方全県にわたる調査収集の結果まとめたが，現時点における注連縄の形態について，ほぼ確実に調査することができたといえるが、特に記述しておきたいことは，太平洋沿岸部，つまり，高知県　徳島県では，本文で述べたとおり，ほとんど注連縄の形態に変化がみられず，民家に注連縄の飾りをみなかった。

これと対照的に，瀬戸内海沿岸，つまり，香川県，愛媛県では，城下町としての慣習，あるいは，商業都市が南四国と比較して多いためか，形態的な変化がみられた。したがって，その種類も本文のように多く，民家におけるシメ飾りの伝承に盛んな様相をみた。

さらに，注連縄の制作技術においても緻密なものがみうけられ，素朴な中にも稲穂の付いた形式のものが多く，また注連縄の精神的伝承性においても正当なものがうかがえる。

次回には，山陰地方の注連縄について，この造形美を探るべく調査研究を進める予定である。尚，今回より，注連縄収集に本学付属高校美術教諭，陶山昌生氏が加わった。

註および参考文献

1．「生活学」日本生活学会編　ドメス出版

2．「注連縄にみる伝承形態の調査研究―九州地方―」佐藤武郎，河野公記，大分県立芸術短期大学紀要第15巻P．11～12

参考文献

日本民俗学全集 4	藤沢衛彦著	高橋書院
民俗学事典	柳田国男著	東京堂
日本民族事典	大塚民俗学会編	弘文堂